



オリヴィエ・メシアン (1908～92)

メシアンの色彩感覚

佐野光司

読響は2017年11月、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン（1908～92）唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に常任指揮者カンブルランと挑みます（演奏会形式・全曲日本初演）。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載しています。第3回の今回は、メシアンが持っていた音と色彩の共感覚について、作曲に及ぼした影響とともに紹介します。（編集部）

色聴（共感覚）

メシアンは晩年に全7巻に及ぶ『リズム、色彩、鳥類学による作曲法』を著した。その第7巻第3章の冒頭で、次のように述べている。

「私は音楽を聴く時、いつもそれに対応する色彩が見える。また楽譜を（頭の中で音を聴きながら）読む時も、それに対応する色彩が見えるのであ

る」

実際メシアンにレッスンを受けたピアニスト木村かをりの話によると、その和音はもっと緑色にとか、紫色に弾いて、などの指摘を受けて非常に面食らったという。このように複数の知覚現象を「共感覚」というが、新生児は生まれて3か月くらいまで五感が未分化なため共感覚を持っているという説もある。

共感覚は意識的に起こせるものでは

なく、本人の意志と関わりなく起こる。そして共感覚の持ち主には様々なタイプがあるらしく、文字が色にとか、数字が色にとか等、対象が色に結びつく場合が多いようだ。中でも音から色が見える場合を「色聴」とっている。

メシアンの色聴はかなり具体的で複雑なものだ。『メシアン その音楽的宇宙』の中で、彼は次のように語っている。

「音楽を聴くと、音の複合体に相応する色彩の複合体が私の中では見えるのです」「私の諸和音は色彩です。和音は頭脳に色彩を発生させ、色彩は和音と共に進展するのです」。メシアンの音楽は〈アッシジの聖フランチェスコ〉に限らず色彩的だが、それは彼の色聴に負うところが大きいだろう。

色彩的な作曲家たち

メシアンは自分がそのような鋭い色聴の持ち主だったため、過去の作曲家についてもきわめて色彩的な音楽を作曲した例を何名か挙げている。何よりまずドビュッシーだ。ドビュッシーは「何色が好きか」と尋ねられた時、「スミレ色」と答えたという。メシアンはドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉、〈夜想曲〉の第1曲“雲”、ピアノのための〈映像Ⅰ、Ⅱ〉、歌劇〈ペレア

スとメリザンド〉などを挙げ、「どれもこれも色彩的で、和音の色彩への比類のない愛情を示しています」と述べながら、ドビュッシーの音楽には「何千という色彩」があるという。

ワーグナーでは楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉の「愛の二重唱」の場面には美しい色彩があり、楽劇〈神々の黄昏〉^{たそがれ}の第2幕の導入部には黒ずんだ緑と陰鬱な紫色があるという。さらにムソルグスキーやストラヴィンスキー、ショパン等を挙げ、またモーツァルトについても「彼が色彩的である点が他の古典派の作曲家との顕著な相違」だという。

これに付け加えるとしたら、スクリャービンを挙げるべきだろう。交響曲第5番〈プロメテウス〉は色光ピアノなるものを開発して、音楽と共に様々な光を投影する。楽譜の最初のページには調（音）と色彩の一覧表があり、ハ調は真紅、ト調はオレンジ色等々である。

もちろん彼らに色聴があったか否かは不明だ。しかし、スクリャービンとリムスキー＝コルサコフはお互いに、何の音が何色に見えるかを話し合っていたという記録がある。

〈アッシジの聖フランチェスコ〉の色彩

〈アッシジの聖フランチェスコ〉に

日本の弟子から見たメシアン

加古 隆

作曲家・ピアニスト

1971年、私はパリ国立高等音楽院で作曲を学ぶため渡仏しました。まず習いたい先生を探すわけですが、当時作曲科の教授だったオリヴィエ・メシアンの名前は知っていても、一切の面識も紹介ありません。その頃はインターネットもなく、お



1972年頃、メシアンのクラス。前列左がメシアン、後列左が筆者

顔もよく知らないまま事務局で教えられた教室のドアをノックすると、先生らしき人が数人の生徒の傍にいます。私は恐る恐る「あなたはメシアンですか？」と尋ねました。「ウィ」、先生は静かに応じ、事前のアポイントもない私に「作品を持って来たなら見ましょう」と、すぐその場でスコアに目を通し、「ぜひ、私のクラスにいらっしゃい」とおっしゃって下さいました。

彼の授業で忘れられないエピソードがあります。居合わせた誰もが退屈するような生徒の譜面を見ながら、メシアンは一つ一つ注意点を示していきます。ところが、その生徒も負けてはいません。「ノン、ノン、先生！ 自分はどう思う！」と、引き下がらない。世界のメシアンに楯突くなんて有り得ない、と私は思いながら、先生が困りながらも決して怒ったり威張ったりせず、顔を真っ赤にしながら熱心に説明を続ける姿に、とても感動したものです。

また、時折外部から有名な作曲家を招いて講義を拝聴する機会がありました。ピアノに向かう作曲家、それを取り囲む学生達。そういう時も、メシアンはいつものように誰よりも早く教室に入ってピアノのすぐそばの椅子に座り、メモを取りながら熱心に耳を傾け、まるで学生のように質問さえするのです。現代音楽の巨匠と誰しも認める人が、何と真面目で謙虚なことか！ そんな彼が大好きでしたし、心から尊敬しています。

おける音色彩は編成において管弦楽の他、120人の混声合唱に加えて5群の打楽器、5種の鍵盤打楽器、3台のオンドマルトノなど、他に類を見ない多彩さだ。特に鳥たちの大合唱となる第6場（第2幕）は、初演を指揮した小澤征爾が楽譜を見るなり「演奏不可能」と言ったほど複雑だが、聴いているだけで万華鏡のように輝く。

メシアンは先の『作曲法』第7巻で、彼の音響パレットとして7種の旋法の他、組織的に構成された48種の固有な和音について、それぞれ詳細な色彩を記している。しかし、〈アッシジの聖フランチェスコ〉の音楽の様々な主題や場面が何色であるかは、私も含めて色聴のない人たちには分析によってしか分からない。

メシアン自身は有名な「移調の限られた旋法」の中で、第3番の第2移置形が「私の諸旋法の中で最良のものだと思っています」と述べているが、それは第1幕第3場で出てくる「天使の主題」で使われている。その支配的な色彩は「灰色と薄紫」である。

〈アッシジ〉の第1幕はヒバリの鳴き声で開始するが、これは『作曲法』第5巻によれば、ほぼチョコレート色とい

える。また、中心となる「聖フランチェスコの主題」は全体の音を総合すると、メシアンが構成した48種の固有な和音番号の12-Dの和音となる。それは「真っ白い雪の上で輝く金色の太陽」の色なのだ。この曲の中心となる人物に「輝く金色の太陽」の色彩を当てたところに、メシアンの聖フランチェスコへの想いが伝わって来よう。

メシアンは〈アッシジ〉の主題を15種挙げており、それはライトモチーフとも異なるが、曲の中ではそれに近い作用もしている。最初に歌われる僧レオーネの歌は「金と茶色」で始まり、トルコ石の青、緑と薄青色で囲まれたオレンジ色と変化する。これらについてそれぞれ色彩を記すことは可能だが、ここでは余地がない。

メシアンは〈アッシジ〉について「私が自分の音楽、和声や音の複合体やオーケストラに色彩を籠めておいても、聴衆には何も見えないのが残念です」と述べているが、私達は色彩は見えなくとも、その色彩的に輝く万華鏡のような響きの連続を聴くことはできるのである。

（さの こうじ・桐朋学園大学名誉教授）

次回は6月号に掲載します